



1990年青山学院大学理工学部卒業。8年間SEとして企業勤務。1999年大阪大学工学部でのSE職を経て、2004年同大学院工学部環境・エネルギー工学科博士課程修了。2000年より追手門学院大学で非常勤講師・講師を務め、2008年より同経済学部ヒューマンエコノミー学科、2010年より同大学院経済学研究科で准教授を務める。

Soil. Soul. Society. 「つながる」ことで暮らしは広がる。

**ミツバチプロジェクト、
順調に始動。**

今春から新たに始まった「追大ミツバチプロジェクト」は人気科目だ。20名の定員に対し、60名以上の応募があった。

ミツバチは野菜・果物の受粉の約1/3を担うと言われており、人の暮らしにも実は大きな関わりを持つているが、世界的に激減の危機にあるという。

「大学近くにある御神木のムクノキにミツバチの巣があるのを見つけ、そこからうまく分蜂（巣分かれ）させることができれば、学内で飼育できると思い、プロジェクトを企画しました」。

学生たちは毎日交替で見回り、天気や気温とともに巣箱の様子を観察・記録する。また数名ずつのグループに分かれ、それぞれが自由にプランを練り実施へ向け奮闘している。

「茨木のお祭りで紙芝居にしてミツバチを紹介したり、小・中・高とも連携し、環境教育を企画したり。生育環境をより良いも

「地域と暮らし」は、自身の専門分野である、持続可能な暮らしをテーマとする授業で、こちらも1限目にもかかわらず100名以上が受講する。

「持続可能な暮らし」とは、人の暮らしが自然とつながらなくなったことでさまざまな問題が生まれているのではないかと、この視点から、暮らし方を見つめ直してみようというもの。生きていくうえで欠かせない衣食住やエネルギー、医療などのあり方

**日々の暮らしを、
足元から見つめ直す。**

「整えながら、地域の人たちとも交流を図れる場所を、とミツバチガーデンの立ち上げも計画しているところ。みんな熱心で、私が置いてけぼりをくらいそうになるほどです」と、今堀先生は笑う。



【写真：右】ミツバチプロジェクトの巣箱は2号館の裏手に設置されている。ミツバチは減多なことでは人を刺すことはなく、安全だ。

【写真：左上】巣箱の内部。

【写真：左下】大学のすぐ近くにあるムクノキ。この樹にあるミツバチの巣が、ミツバチプロジェクトの縁の故郷。

**大学は、アクティブな
コミュニティ。**

「今日は学生たちと一緒に、呼吸法に取り組みました。全員で立って脈拍と呼吸数を計り、呼吸法を行った後に再び計ってみました。するとほとんどの学生の脈拍が下がったようで、実際に体験すると、やはりそれなりのインパクトがありますから。そういう気づきや驚きこそが学ぶことの醍醐味だと思います」。

授業では「学生が主役」と考えている。「オンラインで世界中の授業を聴講できるようになりつつあることから、今後大学はただ知識を受け渡す場所ではなく、こちらからの問いや投げかけから、学生自身が驚きや発見、新たな問いにたどり着ける「アクティブなコミュニティ」であることが重要になっていく気がします」。

授業をワークショップと捉えるならば「ファシリテーター（促進者/世話人）」としてその場をいかに有意義なものにしているかが自らの役割で、だから「教えるというよりも、促す・つなぐ・広げるという意識のほうが強いかも知れません」。

「持続可能な暮らし」についても「ライフスタイルとして押し付けるつもりはありません。ただ、楽しい、面白い、と感じるならいつか役に立ててもらえるのではと思っています」。